

オーケストラ シンフォニカ 東京

第 47 回

定期演奏会

平成 18 年 4 月 11 日 (火) 午後 7:00 開演

第一生命ホール



プログラム

第一 部

指揮： 嶋 直 樹

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1. 歌劇「セヴィリアの理髪師」序曲 | G. ロッシーニ(嶋 直樹編曲) |
| 2. ユーモレスク | A. ドボルザーク(嶋 直樹編曲) |
| 3. 「二つの悲しい旋律」より「春」 | E. グリーク(嶋 直樹編曲) |

第二 部

指揮： 宮 本 皓 永

- | | |
|----------------|-----------|
| 1. 野 に て | 平 山 英 三 郎 |
| 2. 即 興 曲 | 武 井 守 成 |
| 3. 夏山は招く | 中 野 二 郎 |
| 4. パラフレーズ「赤い靴」 | 石 渡 勝 |

第三 部

指揮： 山 本 雅 三

- | | |
|-----------------|--------------------|
| 1. 小シンフォニア「ローラ」 | H. ラヴィトラノ |
| 2. 乙女の唄 | U. ボッタキアーリ(松本 譲編曲) |
| 3. 歌劇「マリターナ」序曲 | V. ウオーレス(E. ポルタ編曲) |

曲 目 解 説

第一部

歌劇「セヴィリアの理髪師」序曲

ジョアッキーノ・ロッシーニ(嶋 直樹 編)

G. ロッシーニ (1792年～1868年) は生涯の前半に40曲もの歌劇を作曲しました。この「セヴィリアの理髪師」序曲は「ウィリアム・テル」序曲とともに今日残っている数多くの歌劇の序曲の中で最も良く知られているものです。ロッシーニはこの歌劇を何と13日間で書き上げましたが、いざ初演という時になって序曲を作るのを忘れていたことに気づき前年評判の良かった歌劇「イギリスの女王エリザベス」のものを転用したというエピソードが残っています。

ユーモレスク

アントニン・ドボルザーク(嶋 直樹 編)

A. ドボルザーク (1841年～1904年) はボヘミア地方の寒村に生まれたチェコを代表する作曲家です。家業の肉屋を継がせたかった父親を説き伏せて音楽の道に進んだ彼は、後年ブラームスに認められ名前が知られるようになりました。50歳を過ぎてアメリカに渡り音楽院の院長になりますが、この時期に交響曲「新世界より」やこの「ユーモレスク」など多くの曲を作りました。この曲は「8つのユーモレスク」というピアノ曲集の7番目の曲でクライスラーによってバイオリン曲に編曲され知られています。

「二つの悲しい旋律」より「春」

エドヴァルト・グリーグ(嶋 直樹 編)

E. グリーグ (1843年～1907年) は北欧ノルウェーの国民的作曲家です。劇音楽「ペール・ギュント」など大きな曲が知られていますが、ピアノ曲や歌曲も非常に多くの作品を残しています。この「二つの悲しい旋律」はオスモン・オラヴソン・ヴィニエの詩に旋律をつけたもので元は歌曲です。第2曲にあたる「春」は、北国の春の美しさを描き、死の前に最後にそれを眺めることのできた感動を表現した美しい曲です。

(嶋)

第二部

野にて

平山英三郎

本来はマンドリン独奏曲(ギター伴奏付き)だった本曲を作者自身が合奏用に編曲しなおして、1956年(昭和31年)6月早稲田大学マンドリン楽部第76回定期演奏会にて初披露されました。また、作者が主宰した砧会では1969年(昭和44年)5月第34回定期演奏会で会として初演されています。

作者は1911年に青森県五所川原に生まれ、2005年6月に94歳で逝去されました。今回作者を偲んでこの曲を演奏いたします。

津軽平野の雪は上から降らずに下から舞い上がってくるといわれます。作者の生地、五所川原でも同じです。待ちに待った雪解けです、大地には陽炎が燃え立ち遅い春の息吹がそこかしこに……人々は解き放たれたように野に、畑にと柔らかい日差しを体イッパイに浴びています。あの厳しい寒さから思えば、なんともいいようなない気だるさがそこにあります。そして、ほほをくすぐる風が……

即興曲

武井守成

1932年(昭和7年)3月の作品(op.42)です。O.S.Tでは同年5月26日第31回定期演奏会にて作曲者

自身の指揮により初演されています。

この曲は作者のことばとして「多事なりし昭和7年春の客観的展望」とあります。ひとつの主題が形を変え、調性を変えて思う存分、自由に空間を飛びまわります。そして緩から急へ再び緩へと聴くヒトを翻弄させながら武井作品には欠かせない独特の和音進行で別世界にいざないます。作者武井守成にとっての昭和7年は、何があり、多事とは何だったのでしょうか……。

武井守成(1890年～1949年)は大正4年にO.S.T(オルケストラ・シンフォニカ・タケイの略称)を創設し、昭和24年に没せられるまで、宮内省後式部長官という官職につきながら作曲や指揮、文献の収集にと音楽活動と発展に尽力を続けられました。

O.S.Tは現在「オルケストラ・シンフォニカ・東京」として、その流れを受け継いでいます。

夏山は招く

中野二郎

この曲(op.160)は名古屋マンドリン楽団により昭和23年10月にラジオ放送されたと記録にあります。作者(1902年～2000年)はマンドリン合奏にたびたび筆をつけていますが、原曲には2本の筆が使われております。今回はF1とC1を入れ編曲したものを演奏いたします。

思いをはせるのは夏山…青い空に白い雲、連なる山なみ。それは赤石山脈、木曾山脈、飛騨山脈それとも養老山系? 夜汽車に揺られてたどり着いた駅、重いリュックを背負い一歩一歩と山頂を目指す…そんな名古屋に住む若者の描いた夢が目に浮かびます。

パラフレーズ「赤い靴」

石渡 勝

この曲はご存知の童謡、本居長世作曲「赤い靴」がテーマになっています。

その歌詞によると、「赤い靴を履いた少女は異人サンに連れられてアメリカに渡り、今はもう青い目になってるでしょう」とありますが実はこれにはモデルがありアメリカには渡ってはいませんでした。作詞をした野口雨情が函館で友人である鈴木吉郎の妻かよさんの思い出話を聞いて書いたのです。

その少女きみはかよさんの結婚前の恋人との間に静岡で生まれた子で、北海道開拓に向かうとき幼い女の子を連れて行き育てるのは無理だと言われ、泣く泣くアメリカに帰国する予定の宣教師夫妻に養女として託しました。それで、「あの子はきっとアメリカで幸せに暮らしている」と信じていたのです。しかし宣教師夫妻が帰国する際、少女は結核を患い床に臥して乗船できる状態ではありませんでしたので、港区麻布十番の永坂孤児院(後に現鳥居坂教会)に預けました。少女は2年後に僅か9歳で亡くなってしまいました。悲しい結末の史実で少女佐野きみの墓誌は現在青山霊園内鳥居坂教会墓石に残っています。

作者の石渡 勝(1960年～)は現在、横須賀マンドリンアンサンブル(神奈川)に所属して演奏活動に活躍する一方、多くの作編曲を手掛けております。(宮本)

第三部 第三部では、女性に因んだ作品3曲を選び演奏いたします。

ローラ マンドリンオーケストラのための小シンフォニア

イジシテ・ホワイトノ

1902年イタリア・トリノの音楽雑誌イルマンドリーノ誌主催の作曲コンクールにおいて第2位に受賞した作品です。因みに第1位は有名な「マンドリンの群れ」でした。題名の「ローラ」は美貌の舞姫ローラ・モンテスから名づけられたと伝えられています。ローラ(1818年生まれ)はイギリス出身で、ヨーロッパ各地をめぐり、その美しさと情熱的な踊りで絶大な人気を博しました。絶頂期にはドイツ

ツ・バイエルンのルードヴィヒ1世の寵愛を受けましたが、学生・市民との間で問題を起こし宮廷を追われ、最後はニューヨークに渡り貧しさの中42歳の波乱万丈な生涯を閉じたといわれています。

作曲者のラヴィトラーノは19世紀後半にイタリア・ナポリ湾にあるイスキア島に生まれ、フランス人から音楽の手ほどきを受け、その後ナポリに出て音楽を本格的に学び、さらにはアルジェリアに移住しフランス国籍を取得し1938年12月16日に同地でなくなりました(出生年不明)。本曲と「雪」「レナータ」がいずれもコンクール入賞作品でラヴィトラーノの3大作品と呼ばれています。明るく、躍動感に溢れ、エキゾチックな作風で、我が国マンドリン界において長く愛奏され続けています。O.S.Tでは他にも「晩年に」「小鳩(道化師)」を演奏しています。

乙女の唄 田園詩的セレナータ

ウーゴ・ボッタキアーリ(松本 讓 編)

「交響的前奏曲」「誓い」「夢うつつ」など圧倒的に重厚なオーケストレーションと甘美な旋律で人気が高いイタリアの作曲家ボッタキアーリ(1879年～1944年)の可愛らしい小品です。松本讓編集「Ugo Bottacchiarri II」(オザキ企画)に収録されています。以下に松本氏が書かれた同誌付属の解説を転載いたします。

この曲はポーロニアのA.Comellini 出版社主催の国際コンクール入選曲で金十字賞を獲得した。1911年3月10日付のフィレンツェの“Lo Staffile”紙は「大いに価値のある仕事だ。ボッタキアーリのより良い作品の一つであろう。」と称讃の記事を載せている。発表後すぐにベルガモ(Bergamo)のドニゼッティ合奏団が上演、その後も各地で演奏された。ピア・アルベルティ(Pia Alberti)に贈られた。吹奏楽の譜面も出版されておりオリジナルはどちらか分からないが、マンドリン曲はマンドリン二部とギターの編成で出版されている原曲にマンドラ、セロ、マンドローネ、ベースを加えて編曲した。

歌劇「マリターナ」序曲

ウァンセント・ウォーリス(エンリコ・ホルタ 編)

作曲者は1812年アイルランドに生まれ、1865年フランスに逝いたオペラ作曲家。軍楽隊長であった父から多くの楽器を学びました。1827年家族と共にダブリンに移り、劇場でヴァイオリン、教会でオルガンを弾いていました。1835年結婚しましたが旅行熱に浮かされ船出し、夫人と生き別れになりました。オーストラリア、西インド諸島、南アフリカ、メキシコ、アメリカを演奏しながら旅し、1844年ロンドンに定住して、本格的にオペラ作曲に取り掛かりました。1845年処女作「マリターナ」は最も成功した曲となりました。その後、歌劇・ピアノ曲も数多く書きましたが、今日では「マリターナ」序曲以外は殆ど演奏されません。(音楽の友社 音楽辞典より引用)

【オペラの筋】 マドリードの町の歌い女だったマリターナがスペイン王の目にとまる。奸臣ドン・ホセは彼女を、処刑寸前の貴族ドン・セザールと結婚させ、貴族の地位を与えて王の寵姫に取り込もうとする。しかし、ドン・セザールにかけて命を助けられた少年がひそかに兵士の銃の弾を抜いておき、セザールは一命を救われ、ホセの計画は破れる。すべてを聞いた王はマリターナへの思いを絶つ。ヴァレンシア総督に任ぜられたセザールはマリターナを伴って赴く。

序曲は豊かなメロディの連続で、この序曲を持つオペラ自身もどんなにか美しく変化に富んだものであったろうと想像されます。

この美しさを引き継いだ編曲者のホルタは、イタリア コモの由緒ある合奏団の首席奏者で独奏家・編曲者としてもコンクールに入賞しています。(山本)

指揮者：○山本雅三 ○宮本皓永 嶋直樹

コンサートマスター：○本間輝樹

第一マンドリン：○本間輝樹 田島明子 城戸かほる 前田啓子
嶋直樹 新谷文子 新居裕久 富田容子

第二マンドリン：諸井美津江 木村栄子 中沢敦子 ○藤田正美
○後藤俊明 中村順子 平賀理恵子 小川洋子

マンドラテノール：○岩片順子 田中倭文子 滝田ふさ子 森下康子
渡邊清 佐々木興治 深野靖夫

ギター：宮本紀子 平田陽一 戸次脩 黒崎恵美子
高橋貴久子 城所敏雄 門田雄二 佐竹真弓
坂本富三郎 澤田行雄

リユートモデルノ：○宮本皓永 ○山本雅三

マンドチェロ：宮崎泰行 田村美恵子

マンドローネ：○家城孝治 石井啓之

コントラバス：佐藤正 ○石黒不二夫

フルート：・西村いづみ

クラリネット：・山崎泰子

ピアノ：・浦島晶子

打楽器：・内田真裕子 ・相川 瞳

〔○———幹事〕
〔●———賛助出演〕

当OSTの顧問として長年の間ご指導頂きました平山英三郎先生が昨年6月15日にご逝去されました。日本マンドリン連盟の顧問でありました先生はマンドリン音楽界の発展に多大の寄与をされ、昭和54年日本マンドリン連盟より特別表彰を、平成7年出生地の五所川原市より文化褒賞を受賞されました。

生前の先生のご指導に感謝申し上げ、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

オーケストラ シンフォニカ 東京 (OST)

連絡先：〒236-0057 横浜市金沢区能見台3-28-6 石黒 不二夫

TEL&FAX 045-770-4806

ホームページ：http://ishii164.net/~ost/